

聖霊のいのち

ローマ8:1-3

中東からの難民たちが集まるキャンプに行った。ISIS やタリバン政権の抑圧から逃れてきた人たちから、さまざまな話を聞いた。彼らはそれぞれ家や土地、また家族を国に残し、脱出してきた人たちだ。国ではよい仕事を持ち、生活も充実していたのに、突然それを奪われる、家族の柱であった父親が連れて行かれ、命を落としてしまう、そのような経験を経てきている人たちも多い。仮設住宅に入れる人はいい方でほとんどが簡易テントや、布を重ねて作った天幕を張り、生活している。たくましく生き延びてはいるのだが、毎日食べるので精一杯、それも支援物資に頼るしかない、となれば将来への不安、失望で心はむしばまれていく。

そこで各国のキリスト教会が協力して、物質的な支援、教育的な支援を行うようになった。私の行ったサマリヤ教会では午前中に難民の方々への語学教育、午後は給食作りと子供たちとの遊び、夜は聖書に興味ある人たちへのバイブルスタディというプログラムを行っていた。

そんな中、彼らにとって最も必要なこと、それは霊の糧だ、ということが見えてきた。イスラム教の宗教としての価値がどれほどあるか、詳しいことはわからない。しかし、「アラーの思し召しのままに」という言葉の背後には「何が起きててもアラー次第、人に不幸なことがおきるのは、その人がどこか悪いからだ」というつきつめれば、虚無主義、奴隷根性につながるものがあるのではないか、という感覚を持った。それと旧約の律法はまったくちがう。創造主が人と別段、何の約束をする必要もないのに、敢えて律法という約束をしてくださった。主はそれによって、我々人間の行動を規制した、確かにそうかもしれない。しかし、考えてみれば、律法に規定されていること以外は、何をやってもいいのである。こんなすっきりした話はないのではないか。創造主は律法を与えて人間をしばった以上に、ご自分をしばられた。ある意味、律法という条件のもと、私たちと対等に向き合ってくださったのである。したがって律法さえも主の愛の表れだ、と言っていい。律法があることで時に人は神に何らかの要求をすることさえ、許された。ダビデの詩編にはその例がいくつも出てくる。主イエスは、その約束をさらに改訂し、新しい契約「神を愛せよ」「隣人を愛せよ」という契約にかえてくださった。行動ではなく、心の持ちようを説いた。これは旧約の細かい律法よりもきびしいものだ。人間には到底守れない。そこで、主は聖霊をつかわし、私たちの内から出る思いによって、それを少しく実践させてくださるよう導かれた。十字架という律法の完全な成就を土台に、今私たちは主の元の自由を味わうことが許された。ただ自由なだけではなく聖霊のいのちのもと、そこには平和と秩序ももたらされた。今、難民の方達に最も必要なのはこの聖霊のいのちである。彼らの一人がこういった。「今、難民生活を強いられている僕たちは、住むところがない。もちろんお金もない。仕事も許可されない。亡命先も見つからない。でも主イエスを信じたことで、希望がある。それはいつかこの境遇が変わるから、という希望ではなく、この境遇が続くとしてもなくなる希望だ。」このことばの重さをかみしめたい。